

あゆみ通信

VOL. 197

あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会推進員連絡協議会)
会長 細川 克彦
広報 本持 喜康

門徒会との合同研修会にご参加を

あゆみの会では、2013年に第2組門徒会役員の皆さんと相談のうえで、従来は門徒会員研修大会として実施されていたものを「合同研修会」として実施して以来、13年目になります。

今年も、合同研修会を次のとおり開催させていただきますので、まだ、残暑厳しい頃ですが、体調を整えていただいて、ぜひご参加ください。

今回の講師は、大阪教区第3組恩楽寺の乙部大信先生をお招きして、講題を「念仏修行～世のなりわいにいそしまん～」と題してお話いただきます。

(別途、ご案内します)

日時 **10月2日(木) 13:30**

会場 光照寺(天王寺区上汐)

講題「念仏修行～世のなりわいにいそしまん～」

講師 **乙部 大信先生**
(第3組 恩楽寺)

参加費 無料

第2組聞法会「正信念仏偈」

講師 **廣瀬 俊先生**

(17組法観寺住職)

参加費 500円

第5回

日時 **9月6日(土) 14:00**

会場 **唯専寺(浪速区敷津西)**

第6回

日時 **10月16日(木) 14:00**

会場 **西教寺(阿部区阿部野町)**

第2組聞法会開催



2025年8月6日(水) 午後2時から天王寺区の光照寺(墨林浩住職)で、第4回第2組聞法会が、組内の住職や坊守、門徒と推進員23名が参加して開催されました。

墨林浩組長の開会・調声により「正信偈」「念仏・和讃」「回向」を勤めました。

前回に引き続き、講師は宮部渡先生(第15組西稱寺)で、「初めての正信念仏偈」の曇鸞章と道綽章を学びました。

冒頭、東本願寺発行の『真宗』誌(1996年)に掲載された阪神淡路大震災(1995年)被災された神戸の住職が、その復興について書かれた記事の、蓮如上人の言葉、「火の中を分けても法は聞くべきに雨風雪は物の数かは」を紹介されて。仏法を聞くことが大事であることを話されました。

そして、曇鸞大師が菩提流支と出会われ、不老不死の仙經を焼き捨てて、天親菩薩の『浄土論』を註釈され、自力と他力についてあきらかにされたこと。道綽禅師は出家、

池田勇諦師のご逝去



6月29日に、真宗大谷派講師で同朋大学名誉教授の池田勇諦氏のご逝去されました。(90歳)大阪教区の講義や、いろいろな

ところでの法話を聞かせていただきました。現在、連載中の「和国の教主」もその一つ。謹んでお悔やみ申し上げます

親鸞のことば

自力の深さに気づかされる

じょうもつぼんぐ
常没の凡愚・海動の群生、
無上妙果の成じがたきに

あらず、^{しんぎょう う}真実の信樂に獲

^{かた}ること難し 教行信証

熱心に、丁寧に説かれて、頭では理解できているつもりになった他力の教えだけれど、どこかで信じきれない自分がいる……。他力だけでなく、やはり自分の力も必要ではないか、と言う思いから抜け出せないのが私たち人間です。

迷いの海に沈んでいる私たち、苦しみの世界を流転し続けている私たちにとって、さとりを開くことが難しいのではなく、悟りにいたる真実の信心を獲ることが難しいのです。

真実の信心とは、阿弥陀さまの本願を信じることであり、自力の深さに気づかされることです。

心の眼は開かれている

あゆみの会設立当初からの会員で、第2組の聞法会始め、難波別院、そして即應寺の聞法会に道を求める巡礼者のように参加されていた、新谷和代さん(90歳)が、難病により眼が見えなくなったと知ったのが、7月26日(土)に開催された、善隆前住職の「親鸞和讃に聞く会」で

した。当日は、息子さん夫婦に車で送ってもらってこられたと言うことでした。

前住職のお話が終わった後、彼女から「長い間、ありがとうございました。聞法してきて、分かったことは『南無阿弥陀仏』しかないです」と。

善隆前住職から、「ずっと聞き続けてくださったなあ」

「私から見たら、『還相回向』そのままです。仏さまの「徳がこの人の上に、身にも心にもあらわれてはたらいっています」そして、「心の眼は開いているから大丈夫です」と。

何が、新谷さんをここへ押し出されたのか、仏法不思議と言うしかありません。長い間、ありがとうございました。(本)

法難・還俗、再出家と言う苦難を経て、曇鸞大師の生涯に触れ、一念発起して聖道門と浄土門をあきらかにされたと話されました。

恩徳讃を斉唱して閉会。

墨林組長から、今回の日程について、9月6日(土)午後2時から、浪速区の唯専寺で、講師は廣瀬俊先生(17組法観寺)と案内がありました。

如是我聞

宮部先生法話聞書 細川 克彦 (佛足寺)



まず、宮部先生は40度近い酷暑の中を皆が出かけてきたことにねぎらいの言葉をかけつつ、蓮如上人作と伝えられる「火の中を分けても法を聞くべきに 雨風雪はものの数かは」という和歌を紹介されて、聞法の大切であることを話されました。

先生の『正信偈』のご担当は、七高僧の天親菩薩、曇鸞大師、道綽禅師の3人で、先月の第1回目は主に天親菩薩の「一心」について話されました。

はじめに、その復習として、「私の信心」と言った時は、それは「二心」である。凡夫であるから、信じていると言ったすぐあとから疑いが起こってくる。「一心」と言う時は、私と言うものを教えてくださる本願のはたらきが身に届いていたんだんだと気付くのが信心であると。

そして天親菩薩章の「煩惱の林に遊びて神通を現じ、生死の園に入りて応化を示す、といえり」について、「林」とか「園」と言うのは人生を表しており、「遊び」とはとらわれないとか、解放と言うことを意味している。私たち

はそのような「遊び」と言うことを願っているのではないかと。それを難しい言葉で言うと「正定聚の菩薩」と。

休憩の後は、曇鸞大師章の「三蔵流支、浄教を授けしかば、仙経を焚焼して楽邦に帰したまいき」について、そのような失敗談を親鸞聖人がわざわざ取り上げられ、また曇鸞大師は『涅槃経』等を学んでおられたが、三蔵流支に会われて感動し、仙経を焼き捨て、天親菩薩の『浄土論』を解釈された『浄土論註』を書かれたことに大きな意義を見られ『正信偈』の2句とされたと。続く道綽禅師については「道綽、聖道の証しがたきことを決して、ただ浄土の通入すべきことを明かす」のところを取り上げられ、七高僧の龍樹菩薩「難行道」「易行道」、また曇鸞大師の「自力」「他力」では、まだ曖昧さが残っていたが、道綽禅師は「聖道門」「浄土門」と言う区別をたてられ、末法と言う時代では聖道門では仏道が達成できないと決定されたと。

そして、誰でも、いつでも、どこでも助かる教えこそ釈尊の最も伝えたかったこととして、本願のはたらきにより救われる『大無量寿経』の教えが親鸞聖人まで伝えられたと、熱く話されました。

紙上法話

和国の教主⑨

親鸞聖人における聖徳太子観
池田勇諦先生
続・観世音菩薩の発遣



親鸞聖人における聖徳太子観

令和七年(2025)年 聖徳太子四〇〇年御遠忌正会

和国の教主

池田勇諦講述
質疑応答・座談 所収

●電子会報●
一仏の教えは家に在り

と、そういう経験が出てくるのです。サッと、というようなものではない。「どうしようか、たずねようか、やめておこうか・・・」。そこで「吉水に訪ねて行け、法然上人の教えにしたがえ」と親鸞聖人に決断せしめたのは、六角堂の夢告ではなかったかと私には思われてなりません。

ともうしますのも、^{ぎょうじやしゆくほうせつによぼん}行者宿報設女犯」(『御伝鈔』真宗聖典725P)と言う偈文がありますね。この偈文と親鸞聖人が法然上人をたずねられたことが結びつかないと言うことが歴史家の間でも言われておりますね。ところがよくよく考えてみますと、親鸞聖人が六角堂に籠られて夢告を受けられたことによって、「法然上人の教えは破戒の教えではなく、無戒の教えだ」と言うことがあきらかになられたのですね。それは「此れは是我が誓願なり」(『真宗聖典』725P)、観世音菩薩の誓願の根源は、阿弥陀の誓願です。ですから^{りんしゅうくわんしんがうきうく}家庭生活を通してはじめて「臨終引導生極楽」、人生そのものが往生浄土の道中、つまり家庭生活こそ仏になる修行の道場である。それが阿弥陀の本願に基づく法然上人の教えなのだを知ることが出来たから、法然上人の門に入られたのでしょ。そこが、比叡の山を降りて百日の間「降るにも照るにも、いかなる大事にも」(『恵信尼消息』真宗聖典616P)、親鸞聖人は吉水に参って法然上人の教えを聞いたずねておられるのですね。そこまで念を入れて、ようやくはっきりした。だから、もう惑うことはない。心が決まったわけですね。そういう心の決まりに導いてくれたのは、観世音菩薩の夢告、すなわち聖徳太子の夢告であった。それが親鸞聖人にとって、自分の将来を決定づけた法然上人と出遇わせて下さった聖徳太子のおすすめ^{かんぱい}を感佩された所以でありましょう。(続く)